

市内初!! 「顔」を表現した遺物



～珍品・両面に顔面がある縄文時代の遺物が発見されました～

○出土遺物の情報	
◎名称	顔面把手（両面） 1点
○造形	内外両面に半球状の顔、中空、表面磨き上げ
○時代	縄文時代中期（約5,500～4,500年前）
○発見日	令和4年10月7日（金）
○注目点	①座間市初の「顔」遺物、②珍しい内外両面に顔面
○出土遺物（外面の写真）	○出土遺物（内面の写真）
<p>【写真：外面側】</p> <p>高さ：約13cm ※内面側も同様</p> <p>（幅：約15cm）※内面側も同様</p>	<p>【写真：内面側】</p> <p>（顔面の直径：約7cm）※外面側も同様</p>
○発見場所について	○顔面把手付土器の想定図
<p>○市役所 ●発見場所</p> <p>座間市緑ヶ丘三丁目 かにがさわ 蟹ヶ澤遺跡 （座間市周知の埋蔵文化財包蔵地No.5）</p>	<p>【写真：内面側】</p> <p>○想定本体について</p> <p>ふかばちがた ・深鉢形の縄文土器</p> <p>・口径：約40cm</p> <p>・器高：約60cm</p> <p>・解説：「顔面把手」とは器 こうえんぶ の口縁部に把手状の装飾と して付く、深鉢形縄文土器の 一部です。</p> <p>想定本体</p>



座間市の緑ヶ丘地域、かにが沢公園の東側台地上における周知の埋蔵文化財包蔵地内で、令和4年10月7日（金）に埋蔵文化財保護の手続きを経た公共工事が着手された際に、写真のような出土遺物「顔面把手（両面）」が発見されました。

この出土遺物は、縄文時代中期（約5500年前～4500年前）の所産です。座間市内では「顔」を表現した遺物として、初めて確認されました。

この出土遺物は、顔面把手付土器と考古学界一般に呼称されている本体部分（深鉢形縄文土器）の一部破片（顔面把手）として出土したもので、復元が困難なものの、同様の遺物は南関東・甲信地方を中心に出土事例があり、そのため元は深鉢形の縄文土器であったものと想定できます。

この大きな立体構造である顔面把手部分が、人為的に破損させられていることや、日常生活の場での調理器具や食器としての使用に不向きなことから、儀式などの特別な場で煮沸道具として使用されていた可能性があり、市内の縄文ムラの内容や性質を探る重要な手掛かりになります。

顔面把手付土器については、座間市の近隣市では相模原市や厚木市などで既に博物館へ収蔵・展示されています。しかし、両面に顔面がある同様の遺物＝「顔面把手（両面）」は、県内及び全国的な出土事例からも珍しく、考古資料として貴重な価値がありながら、造形面でも縄文人の美への造詣の深さを感じる良好な出土品です。

（2022年11月7日時点）